

眞鍋 博

たびたびの旅

たびたびの旅

●真鍋 博

●文藝春秋



●著者紹介

昭和8年愛媛県生まれ。多摩美術大学油絵科卒。二紀会同人。東京イラストレーターズクラブ会員。日本SF作家クラブ会員。著書に「ひとり旅教育」「はくの家庭革命」「自転車讃歌」「未来行き列車に乗って」等がある。沖縄国際海洋博テーマ委員、バイロロジーをすすめる会推進企画委員としても活躍している。

たびたびの旅

昭和四十九年四月三十日第一刷

著者 真鍋 博まなべ ひろし

発行者 阿部 亥太郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地
電話 東京 (二六五) 一一二一一

郵便番号 一〇二

印刷所 凸版印刷

製本所 中島製本

*万一落し字の場合はお取替えいたします

目次

食卓から醬油の街へ

7

珍自転車霞ヶ浦一周記

23

古地図旅行

39

信州・育てる村

57

元祖・人間性都市を行く

85

七つめのふるさと

105

春は飛行船に乗って

123

ゆっくり歩こうⅡユックリズム

137

夢のかけ橋を馳ける

151

東京自然旅行

171

紙々のふるさと

187

サイクリング・城下町

213

航路のない航海

229

日本人・見本市

251

富士づくし

267

旅を発明する

287

装幀 真鍋 博

表カバー写真 右高英臣

本文扉写真 山川進治

育てる会・旭川市・オリ

エント飛行船・交通遺児

育英会・鳴門市・共同P

H・埼玉県製紙工業試験

場・立石電機・春内順一

たびたびの旅

食卓から醬油の街へ



某月某朝、といってももう二年も前のことだが、わが家の食卓の上に、ミソ汁、モヤシとサヤエンドウのバターいため、おたふく豆、鮭のかす漬と高菜の漬物が並んだ。

ぼくは四国の瀬戸内海岸生れだから、毎朝、わかめのミソ汁が欠かせない。どういうわけかその朝、ミソのことが気になって「このミソ、なんてミソ？」と女房に聞いた。「イナカミソです」という。「イナカはイナカでもどこの田舎？」女房は「たぶん信州ですよ……」と答えた。ところがでである。夕方、スーパーで聞いてみたら「東京産の田舎ミソ」だった。「しんしゅうミソ」は文字ちがひ。「信州」ではなかったのである。

よせばいいのに、その直後ぼくがそれを随筆に書いたら、それを読んだミソ会社の社長さんから手紙がきた。そして、「あなたの書いた『ミソ批判』は、当社製品に対するものと思われませんが、袋詰のミソについては、食品衛生法により、ミソの中味を製造した場所ではなく、袋詰包装された場所を表示するよう義務づけられているため、ご指摘のようなご批判をいただいたものと思います。中味につ

いては正真正銘、当社の長野信州工場において……」とていねいな内容であった。

そんなものかと思って、スーパーに出かけてみると、納豆にしろ、漬物にしろ、袋詰やバックされた食品には製造住所が書いてある。つば漬は北区滝野川、味付きゅうりは目黒区、青しその実は青梅市、らっきょうは中野区鷺宮、ウニとシオカラは中央区日本橋、漬物の詰あわせは新宿区諏訪町と……都内が多く、漬物にいたってはわが家と同じ区の隣の町である。

都市化のはげしい都区内で、こんな漬物やらっきょうをどんなふうにしてつくっているのか……。ばくは実に不思議な気がした。こんな製造所の表示も、袋やバックに印刷されて一応家庭の台所までついてくるが、食卓に並ぶ前にはポリバケツにすてられ、亭主も子どもも、それがどこでつくられたものか、おそらく知らないまま口に運んでいる。いや、買ってきた主婦さえも、値段は見ても、製造住所までは見ないにちがいない。

食卓ってテレビ的だなあとつくづく思った。朝、昼、晩、いろんなものが食卓に並ぶが、一週間を通してみると、まるで変りばえがしない。しかも、自分でとってきたものではなく、向うからやってくる——待っていれば流通のルートにのって流れて来るものばかりだ。ちょうど新聞のテレビ欄から番組をさがすように、スーパーや八百屋、魚屋……とチャンネルを切替え、目にうつるものからだけ食事をつくっている。そして、それがどこから運ばれてくるのかまったく知らないでいる。

こんな一見便利で気楽な受動的消費文化のなかで、ときどき能動的な生活へのあこがれがムラムラとこみあげてくることがある。こちらは止っていて、向うが動いてくるというテレビ的生活でなく、こちらが動いていって自分の眼と足で確認したい——野次馬というか、とにかくは気になって気

になって仕方のないタチなのだ。そこで醤油も醬油さしでなく、台所の戸棚をあけて一升びんを引っぱり出してラベルを見てみたら、産地は千葉県野田市。なんだ、東京の隣じゃあないか！ ヨーシ、行ってみるか!! 食品はいつもどこからともなく台所に流れこんでくるのだから、その源流をさぐってみてやろう。流通の川をさかのぼるのだ。

人には、いつかチャンスがあったら、やってみたいと思っている何かが必ずある。もし、時間があつたら……、もし、お金があつたら……、もし、よい手段がみつかつたら……といつも考えている。そして、それが案外、個人個人の夢や願望にもなっている。

休日、ある人にとっては「手段の好機」だし、ぼくにとっては「時間の好機」だ。
休日というのは、いつもとちがうそんな日のことだ。

醤油や味噌は、そんな旅への触発剤の一つである。

ところで、野田ってどこかなあ、千葉は千葉でも、うんと遠いところにあるのだろうか……と地図を見ながら、房総半島の先の方をさがしてみたが、意外や意外、野田は千葉の北端、東京よりも北、それも東京のすぐ近くにあった。

国電で、上野から大宮まで行き、大宮からはその名も東武野田線というのに乗った。

これから乗るという路線に、わが目的地名がついているなんて、なんとも心強い。たぶん終着駅が野田であり、そこが、わがたずねる醤油の町なのであろう。東武野田線の車輛は国電よりは一まわり小さい。小さいホームに二輛編成の電車が入ってきた。

浦和や大宮の人口密集地をちよっとすぎただけなのに、東武線の小さい電車に乗り換えると、大宮

から二つ目の駅、大和田あたりではもうわら屋根の家が見えはじめた。

どの家も防風林にかこまれて、畠の中に点在している。まるで盆栽のような風景だ。そういえば、大宮公園には、盆栽村の名所案内があった。しかし、岩槻近くになると、俄然、新興住宅が目立ちはじめ。それが東岩槻にさしかかるにしたがって、その家がだんだん小さくなりはじめ。線路が高架になると、それがまるで砂漠のように眼下にひろがるのだ。どれも同じ形、同じ大きさ、同じ色の二階建の家、マツチ箱みたいだなあと思っていたら、「ベビーハウス分譲中」という看板がでていた。不動産業は、不道德産業だと思っているけど、ベビーハウスと最初から開き直られると憎む気がしなくなる。とはいっても、ベビーハウスっていったいなんだろう。子どもだましの家という意味なのだろうか？ それとも赤ちゃんを生める家ということだろうか？

しかし、それが、豊春をすぎると再びここが東京から一時間で来られるところかと思うほどのひなびた田園風景にもどる。稲刈りのすんだ田の中で、子どもたちが野球をやっている。焼畑のあとが斑らにひろがって、香ばしい匂いが車内まで伝わってきそう。

その田のあちこちに、カキの木が赤い実をのこして立っている。いいなあ……と思いつつ、ディスカバー・ジャパンのポスターそっくりだなと思ったりもした。二十分くらい走って春日部につくと、ガラッと人が降りてしまう。東武野田線はここで東武伊勢崎線と交差しているから、乗換えの人も多いのだろう。ガラッと降りていったあとに新たにバタバタと人が乗込んできて、ここで客層もガラリと変った。新しく乗り込んできたのは、チャンチャンコで子どもをおんぶしたヤングママだ。とにかく車内はぐっくにぎやかになる。

藤の牛島なんて駅は、あの古いマクラ木に有刺鉄線をはった柵のある田舎の停車場風の駅で、ホームの真ん中に田舎のバス停みたいな小屋があり、二、三人のおばさんがそのなかで電車を待っているというのどかさだ。それが川間になると西部の町に変身する。同じ新興住宅街でも、岩槻あたりとちがいが、どこの家も玄関前に附属品のようなマイカーがおいである。駅の近くには電気店や雜貨店があるが、それが住宅と同じつくりだし、寿司屋やそば屋まで同じような新建材の家だから、実に不思議だ。七光台という駅は、畠のまったなか、なにもないところに駅だけポツンとある。

この沿線、切り株の残った稲田のなかで子どもが風をあげているかと思うと、新興住宅街がはてしなくひろがったり……まるでタイムトラベルをしているような気持ちにさせられ、醤油のことなどついうっかり忘れるところだったが、とうとう電車は野田市へ着いた。大宮から四十五分も乗ったのだろうか、ところがその野田市がまたちょっとした「異風土」だった。

電車が止るや、真先にキッコーマンの商標が目にとびこんできた。駅を降りると、そこはもう工場のなかという感じだった。

工場といっても、銀色に冷たく光るコンビナート風の工場でもなければ、ノコギリ屋根に煙突の工場工場した風景でもなく、黒いかわら屋根にレンガ——そのレンガもすすけて黒く、まるで映画の明治時代のセットのような工場が連なり、その工場にそって、道があっちへ曲り、こっちへ曲って、おっかなびっくり歩いている多くの鼻を醤油独特の匂いがうつ。その工場につづいて経営者一族の住いだという白い壁に黒い屋根の土蔵があって、まるで岩田専太郎のさしえのなかを歩いているような気さえた。

とにかく不思議な町である。

東京から、一時間ちょっとのところにあるにもかかわらず、この町は江戸川と利根川にはさまれ、しかも埼玉と茨城にはさまれて、まさにボンとどりのこされたようにある。町をブラブラ歩いて、スーパーがあるわけでなし、ボウリング場のある気配もない。現代都市の一般的表情といったものを感じたのは、地図を買いに本屋へ入った時である。ひっそりとした町に似あわず、ここには中学生や高校生がいっぱいいて本を読んでいた。

地図を拡げながら歩いていくと、利根川にそって白いお城の形をした工場があった。屋根に鯪、城壁の周囲に堀をめぐらし、朱の欄干の橋がかかっている。天皇様の醤油をつくる工場だという。御用蔵というのだそうだ。中では朱塗りの桶で、昔のままの製法で醤油をつくっているという。どこまで歩いていても、キッコーマンの工場がある。

工場といっても、どこか一カ所にかたまっているというのではなく、第一から第十までの醤油工場が野田の市内にひろがり、その工場にかこまれて野田の町があるのだ。もともと良質の水に恵まれたこの町は、江戸の初期から、茂木家や高梨家一族の何軒もの醤油屋があり、一時は各家が激しい生産競争をやり、市場での対立があまりにはげしくなったので、同族離反をおそれ、大正時代に一つにまとまったのが野田醤油——いまのキッコーマン醤油らしい。

工場が九つもあっても、製造工場もあれば、ビン詰め工場もあり、輸出規格の工場もある。そして第七工場が主力工場だと土地の人が教えてくれた。第七工場には立派な研究所があった。

ぼくはその主力工場の正門に立って、中へ入ろうか、どうしようかと迷った。中に入っ

受付に名刺を出せば、工場を見せてくれるかもしれない。最近はこの工場も、見学者を受け入れる態勢がととのって、案内役さえいる。しかし、今日、ぼくは、醤油のできる過程を見にきたのでなく、この醤油をつくっている町を見てみたかったのである。ただそれだけだ。だから、ぼくは工場の中に入ってゆくのはやめて、駅前までトコトコと帰ってきた。

線路にそった殺風景な駅前の通りには、ピンク映画の看板といっしょに、野田博物館の案内が並木にもたせかけてあった。「中世の野田展」というのが開かれているらしい。駅前の食堂でここはそんなに古い町ですかと聞くと、石器がでるくらいですからと大古の昔からの歴史を自慢された。とにかくここは古い町なのだ。どこまで行ってもついてくるこの匂いは、醤油の匂いというより、この町の匂いなのだろうか。

ブラブラ歩いて工場をはずれ、醤油の匂いがしなくなっても、この町には醤油にイメージされるような素朴な雰囲気がついてくる。新建材の家なんかあまり見かけないし、どの家にもいけ垣や小さな庭がある。方角などおかまいなしにそんな野田の町を歩いていたら、博物館の前に出た。

博物館といっても、古いお屋敷で、昔の由緒ある建物らしい。車でやってきた人が二、三人その中へ入っていくところだった。この博物館を見たら、きっと野田の歴史を知ることができるだろう。しかし今日は社会科の勉強に来たのでも、歴史の勉強に来たのでもないから、またここを通りすぎた。

雨がパラパラ降ってきたので、タクシーに乗った。「ひなびたい町ですね、東京からこんな近くに、こんな町がボツンとあるなんて……」という、運転手は、「冗談じゃあない、醤油の茂木一族が、町の発展をはばんだからこんなに遅れているだけだ」という。